

聽訟指令

近藤圭造編輯

四

C2  
3  
035

東京圖書館

新門 一四函

部 一一 二架

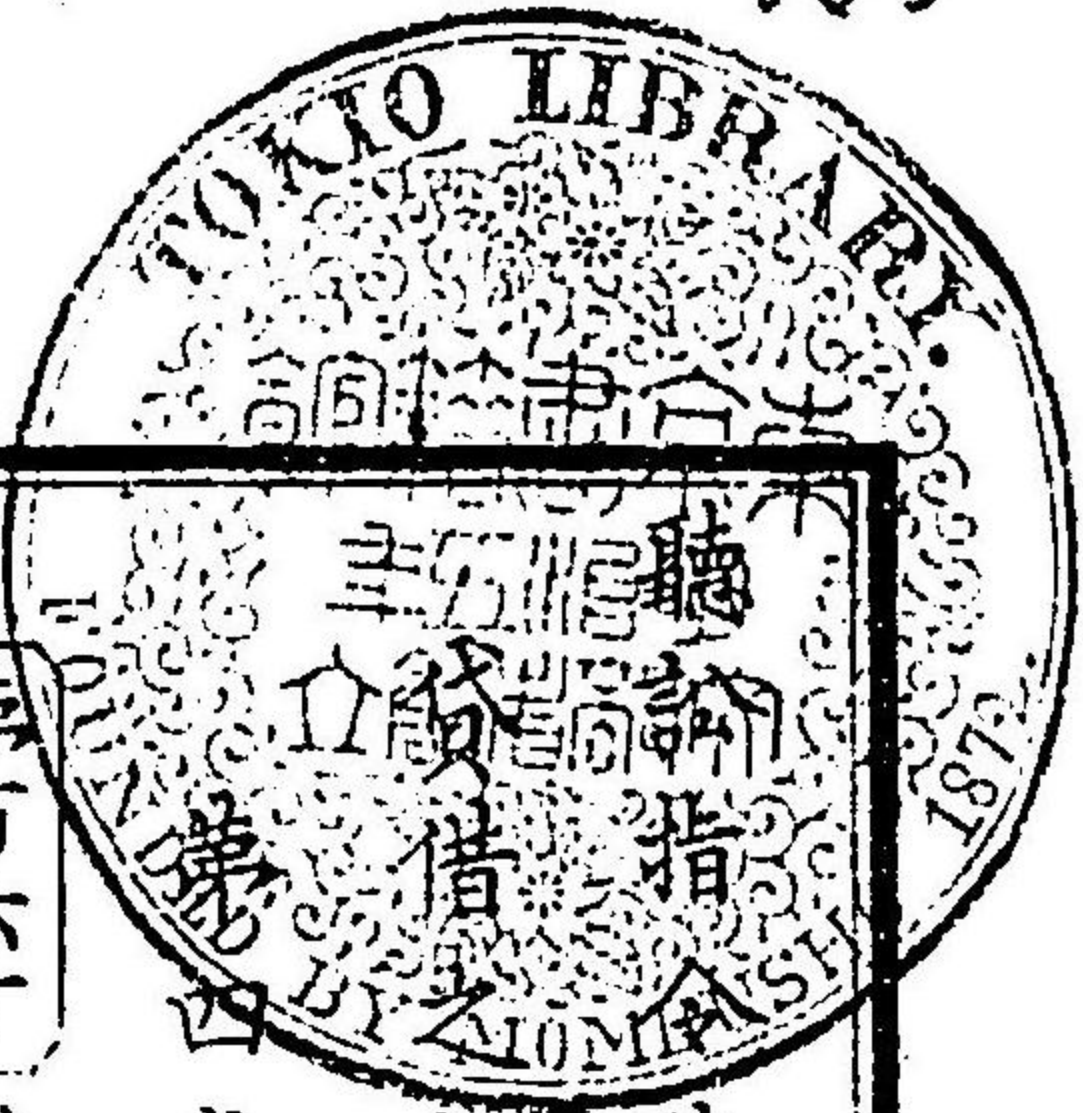
類 九〇一一號

共  
十四  
本





C2  
3  
035



第一篇目録

部 續

第四卷

第百六十 講金丁卯十二月己巳六月前後ヲ區分スヘキ事

第百六十一 永年季質地并他縣相手取り身代限ノ事

第百六十二 預リ金穀ノ事

第百六十三 預ケ金費用後身代限ノ事

第百六十四 流地ノ事

第百六十五 身代限リノ事

第百六十六 里正奥印ナキ質入ノ事

第百六十七 地所質入ノ事

明治二十年文部省交付



第百六十八 丁卯前貸借書改メノ事

第百六十九 年期明ケ受戻シノ事

第百七十 負債主承諾セサル利息ノ事

第百七十一 身代限ノ者貸金ノ御布達

第百七十二 戊辰前後ニ係リタル頼母子講ノ事

第百七十三 身代限リ件々ノ事

第百七十四 貸地年季ノ事

第百七十五 轉賣ノ事

第百七十六 月賦金ノ事

第百七十七 貢租未納身代限ノ事

第百七十八 舊藩へ轉貸ノ事

第百七十九 懲役人貸借ノ事

第百八十 身代限リ件々ノ事

第百八十一 地所賃入ニ付テノ事

第百八十二 他人ノ印ヲ詐偽スル事

第百八十三 年月日書改メノ事

第百八十四 預リ金穀ノ事

第百八十五 家祿渡シ次第返金ノ事

第百八十六 便利ニ任セタル賃入レ證書ノ事

第百八十七 預リ金穀ノ事

第百八十八 塩濱賃入レノ事

第百八十九 身代限リノ者月賦等貸金ノ事



第百九十 通行外國人貸借ノ事

第百九十一 小作滞リ家屋貸賃ノ事

第百九十二 赤貧文盲人借金ノ事

第百九十三 貸金名目ノ預ケ金ノ事

第百九十四 貸借諸件ノ事

第百九十五 貸入レ書入レノ事

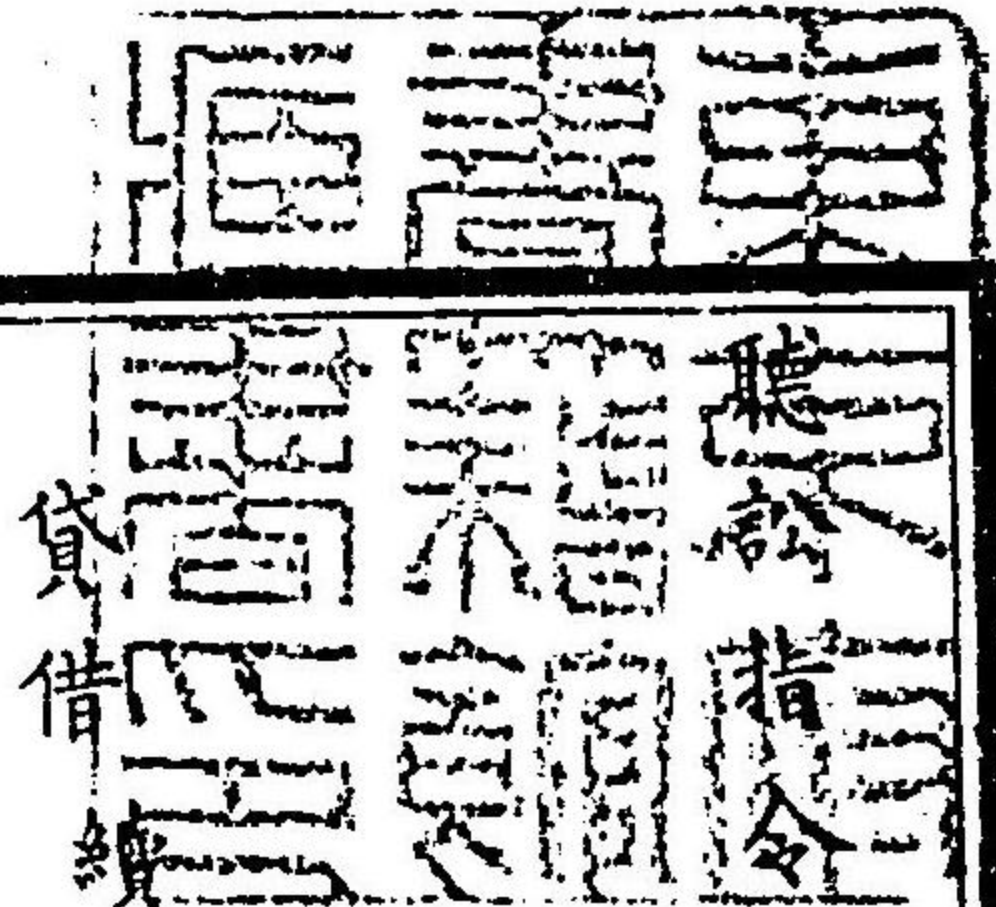
第百九十六 舊藩貸下ケ金アル身代限ノ事

第百九十七 質物臺帳ノ事

第百九十八 詐偽借金ノ事

第百九十九 貸借諸件ノ事

第二百 損料品ヲ費用スル事



卷四

三河 近藤圭造 編集

第百六十 講金丁卯十二月己巳六月前後ヲ區分スヘキ事

日誌第百廿一号司法省裁判所  
明治七年七月廿八日指令

丁卯十二月己巳六月前後

講金延滞等ノ訴訟、方今受理致スヘキ規則ニ之アリ、然ルニ

講金ノ中、預金ノ名目ニテ、全ク禮金ヲ受取ズ、且ツ利子モ生

セサル方法アリ、又利息ヲ生スヘキ方法ノ中ニテ、質物ヲ受

取リ置タルモアリ、是等ハ身分ニ因リ、丁卯十二月己巳六月

前後ノ別ナク、總テ裁判及フ可ニ付、別段差支ノ虞モ之ナシ

ト雖モ、質物モナキ利息ヲ生スル方法ノ講金ニテ、其發起丁



卯十二月以前ニアリテ、其満會期限己巳六月後ニ係リタル講金ノ出入ハ、平民相互ノ分ハ戊辰正月一日後、華士族ニ係ル分ハ、己巳六月廿六日後ノ延滞ハ、可及裁判裁ニ候ヘ共、大槪講金ノ法タルヤ、初會ヨリ満會ニ至ル迄、毎會人々幾圓ノ金高ヲ集メ、闡取又ハ入札ヲ以テ、之ヲ取ルヘキ定ニテ、其取當リタル者、即チ當日ノ借主ニテ、満會迄ニ之ヲ拂ヒ戻スヘキ趣意ナリ、然ハ平民相互ニテ、丁卯十二月前ニ取當タル者ハ、則チ壬申三百十七號布告期限前ノ借金ニテ採上ヘキ者ニ非ス、華士族ニ係リテ己巳六月前ニ取當リタル者ハ、則チ壬申三百號布告期限前ノ借金ニテ、是亦採上クヘキ者ニ非ス、概シテ期限後ノ延滞込、之ヲ受理シ難シ、去込戊辰正月後、平

民相互ノ貸借、并己巳六月廿六日後華士族ニ係ル貸借ハ、受理不受理ヲ論スヘキ筋ニ之ナキ處、只其發起ノ日、右兩布告ノ期限前ニアルヲ以テ、總テ受理致サ、ル時ハ、眼前期限後ノ借財ヲモ、受理セサル譯ニ相成リ、不相當ノコトニ之アリ、就テハ平民相互ノ分ニテ、丁卯十二月以前ニ取當タル者ニテ、同月前ハ勿論、戊辰正月後掛金滞リヲ訴出ルル、即チ丁卯前ノ借金ノ返済ヲ求ル筋ニ付、受理致ス可ラヌ、戊辰正月後ニ取當タル者ハ、則チ丁卯後ノ借金ニ付、此者ニ係リ、爾後掛金延滞ノ訴ヲ為スルハ、受理致ヘ久且、華士族ニ係ル分モ、此理ニ因リ、己巳六月前後ノ區分ヲ立、受理致候方、至當ニ之アル可ク歟、右講金ノコトニ付テハ、是迄指令取調候類例モ之アリ



候ハ共之等ノ區分判然致サス、現今伺出ノ向<sub>今</sub>モ有之、差支候間此段相伺候也

指令

伺之通、丁卯己巳前後ノ區分ヲ立テ、受理可致候事、

第百六十一

永年季質地并他縣相手取り身代限ノ事

同上小倉縣伺  
七年七月廿八日指令

質入書入御規則増補第十五條ニ、是迄質入書入ニ致置候分

ハ、前約ノ年季据置不<sub>レ</sub>告云々ト之アリ、右前約ノ年季据置ト

ハ、壬申二月十五日以前取引ノ永年季質地ニテ、明治六年七

月以後ニ至<sub>レ</sub>猶殘年季幾十年有之<sub>レ</sub>、其儘据置候歟、抑又十箇

年以上ノ永年季ハ、不<sub>レ</sub>筋ニ付、十箇年過去候ハ、流地申付可

然哉、

永年  
期  
質地

他縣  
交  
訟

甲縣下ノ者、乙縣下ニ寄留シ、丙縣下ノ者ヨリ其寄留人ノ相

手<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>質金アルヲ、乙縣廳ヘ訴テ、審判ノ上遂ニ身代限濟方可

申付所、家産ハ、甲縣下ニ有ルヲ以テ、百八十七號身代限、御規

則ニ依<sub>レ</sub>テハ、入札拂手續、并六十日間揭示等、乙縣廳ニ於テハ

處分難、行届候間、右一件書類相添、原被告共甲縣廳ヘ相廻シ、

一切處分ヲ託シ可<sub>レ</sub>然哉、御指令被<sub>レ</sub>下度候也、

指令

第一條 明治六年七月三十一日前ニ、質地年季据置ノ訴訟

ハ、年季ノ定有之<sub>レ</sub>ハ、殘年季ヲ据置キ、年季ノ定無<sub>レ</sub>之分ハ、三

箇年季ニ相定メサス可<sub>レ</sub>シ、尤同年八月一日以後ノ訴訟ハ、

同年第十八號并増補第十五條、本年第六號第五十二號ノ



布告ニ因リ處分シ、統ト難賣トノ別ハ、明治六年第五十一號布告、并當省第四十六號布達ノ通可心得事、

第二條 乙縣廳ニ於テ、身代限申付タル時ハ、其身代ノ割賦

モ、同廳ニ於テ取扱フ可キ筋ニ付、甲縣下存在ノ家財等ハ、

甲縣裁判廳ニ掛合、身代難賣ノ處分ヲ為サシメ、其代價并

ニ儲蓄ノ金ヲ、乙廳ニ受取リ、夫々配當處分可及事、

第百六十一

預リ金穀ノ事

同上愛知縣同 七年七月廿八日指令

預金穀ノ儀、利息又ハ禮金等ヲ不受分ハ、丁卯十二月晦日以

前ノ分共取上裁判致シ來候處、本年第二十七號御布告ニ預

金穀ハ其證文中ニ封印ノ儘預リ置候歟、或ハ預リ中融通使

用為サ、ルノ明文ナキ云々ト有之ニ付、前條丁卯以前ノ預

預リ金

金穀モ右明文無之證文ハ、貸金穀同様ニ付、本年五月一日ヨリ以後ハ、壬申第三百十七號御布告ニヨリ、不及裁判候テ可、然哉相伺候也、

指令

本年第二十七號布告ハ、裁判上結局ノ處分ヲ定タル者ニテ、壬申第三百號同三百十七號布告ノ期限ニ因リ採用不採用ノ區分ヲ論スル一ニ之ナキニ付、右壬申兩布告期限前ノ預金穀訴訟採用不採用ノ儀ハ、壬申四十一號當省布達第二條ノ通可相心得事

第百六十二

預ケ金費用後身代限ノ事

同第三十三号山形縣同 七年七月三十一日指令

御省日誌第四十八號本年一月東京裁判所伺、借主身代限掲

預リ金費用



示中、無利息ノ預ケ金證文ヲ以テ、同人ハ相係リ訴出ル所、右  
金ハ既ニ費用致シ有之節、貸金同様割賦ニ差加、預ケ主ハ受  
取分不足スル時ハ、身代限、處分濟方ノ後、斷獄課ヘ差廻シ可  
然哉、伺ノ通ト御指令有之候ニ付テハ、右ノ斷獄掛リニ於  
テハ、費用受寄財産律ニヨリ罰スヘキ哉、然ルルハ同律内、物  
ヲ追シテ主ニ還スト有之候得共、身代限、處分ノ餘物ヲ追ス  
ルニ物ナシ、法ニヨリ處刑ノミイタシ可然哉、併セテ奉伺、候  
也、

指令

伺ノ通

第百六十四 流地ノ事

同第百七号埼玉裁判所伺  
七年八月十七日指令

流地

埼玉縣管下武州葛飾郡吉屋村浮谷五郎右衛門ヨリ、同郡中  
井村岡田宗五郎ハ係リ云々、第百十九号相同、候處、年貢上納  
云々、同所處分可及事ト御指令御座候、右ハ年貢上納受取ハ、  
證書上ニ地主ニ於テ相勤居候ハ、願レ居、證書ノ意味小作年  
貢高取極メハ無之候ヘ共、取上ケ高ノ内ニテ、年貢諸掛リヲ  
相勤人、全クノ作徳ヲ平均シ、石高ニ積リ、金主ヘ相渡候約定  
ト相聞工、然ルルハ年貢上納主ハ、地主ニ候共、其實金主ヨリ  
相納候筋ニ付、証書面従前通法不相振上ハ、期限明治六年前  
後ノ別ヲ以テ流地難賣リ裁判及ヒ可然筋ト相心得候、共、證  
書中書入申賃地、或ハ年季明ケ不受戻ルハ、流地證文ニ可書  
換有之、右文言ニ於テ書入賃入ノ別難決相同候儀、處、御指



令ノ趣ニテハ、證書中ニ我等小作仕、御年貢諸役何ニテモ相掛  
リ候分、拙者方ニテ御上納云々ト有、之地主上納主ニ相成候  
ハ、判然致シ居候ニ付、貸金ト見据、戊辰前後ノ別ヲ以テ、採  
採ヲ決シ可然哉、

指令

證書中ニ、我等小作仕、御年貢諸役何ニテモ相掛リ候分、拙者  
方ニテ御上納云々トアルヲ以テ、地主上納主タル事判然ト  
ノ見込ハ、上納ヲ勤ムル者ハ、必ス己レノ名前ヲ以テ勤ム可  
キ者ト云ノ論ナル可シ、然レハ、縱令代人ニテ、上納ヲ勤ムル  
時ハ、代人ノ名目ニ非スニテ、代人自分上納主ノ名前ヲ以テ  
勤ム可キカ不相當ノトニ非スヤ、既ニ前伺書中ニモ、是等ノ

意味有之故、尚又念ヲ入ル可キ為ニ、指令及ヒタル儀ニ付、前  
指令ノ通可相心得事、

第百六十五

身代限リノ事

同第百三十九号青森縣同  
七年八月廿二日指令

負債主兩名、或ハ三四名連印證書ノ中、一名或ハ兩名失踪逃  
亡ノ者之レアル節、債主ヨリ出訴ニ及フト雖モ、現在負債主  
共於テハ、該借證書連名ノ中、失踪逃亡ノ者之レアルヲ以テ、  
償還難行届、旨申出ニ於テハ、失踪逃亡ノ者ヲ除置シテ、身代  
限リノ處分ニセンカ、將夕出訴前後ノ失踪逃亡例ニ從ヒ、之  
ヲ處センカ、然ル時ハ現在負債主ニ於テハ、如何區處裁斷可  
然哉、

負債主ノ親族、或ハ朋友等ニテ、代償人ニ相立テ、債主ハ示談

清口後  
不返済

連印中  
逃亡



熟議ヲ遂ケ、日延約定致スニ付、訴訟全ク落着マシ處、マクコ  
ノ代償人於テモ、約定日限償還セザルヲ以テ、債主再訴ニ及  
フ時ハ、總テ代償人ノ引請ニ歸シテ、結局身代限迄ノ處分ニ  
及ハンカ、將夕原負債主ヲ以テ之レニ充テ、處分スヘキカ、如  
何裁判可然哉、

訴訟入費

負債主身代限リノ處分ニ至ル節、素ヨリ債主へ訴訟入費償  
却スルノ資力ナキハ、償却セシムルニ及ハス、債主ノ自費ニ  
歸セシムヘキヤ、マクハ該費金高通計ノ上證書裏書ノ中へ  
書込可然哉、  
但シ該處分ノ者ハ、訴訟入費償却ノ限リニアラス候哉相  
同候也、

指令

第一條 證書中、銘々分借ノ條約、并ニ銘々返却ノ條約明記  
無之ニ於テハ、現在ノ者ニ、證書上記載ノ總額ヲ償却致サ  
ス可キ事、

第二條 代償ノ證書面ニ依リ、處分ス可キ事、

第三條 原告人ニ償却スヘキ部分ノ入費ニシテ、不足之レ  
アル時ハ、不足ノ分、新規證文ニ仕立、其者身代持直ニ次第  
償却可受旨、常例ノ通り裏書シ、原告人ニ下附スヘキ事、

第百六十六

里正眞印ナキ質入ノ事 同上石川縣伺  
七年八月二十二日指令

地所質入規則御發令以前ニ係ル約定ニテ、地所ヲ相對質入  
致シ、其證書面、里正或ハ村長等ノ眞印ヲ無之、全ク取主置

里正眞印  
ナキ質入



主限ノ約定ニ致シ置候處、昨六年七月以前満期ニ相成候故  
 ヲ以テ、同年一月御發令規則ニ依リ、證書相改不申、爾來苦情  
 ヲ生シ、違約ノ儘、今日ニ立到候分、往々有之候處、元來從前ノ  
 舊藩制ニテモ、地所ノ質入ハ、必ス里正村長等ヨリ締ノ為メ  
 奥印可致筋ニ相成居、其義ニ不及分ハ、嚴禁ニ有之候、尤今日  
 ニ至リ、舊藩制ヲ論スル理ハ無之候、得共、從前ノ約定ナレハ、  
 里正村長ノ奥印有無ヲ問ハス、總テ質入ニ相立候テハ、地所  
 ノ締方ニモ差響候譯ニ付、固ヨリ規則御發令前ニ係ルト雖  
 モ、從前ノ約定ハ、舊制ニ依テ取結可有之筈ニ付、其節里正村  
 長等奥印無之分ハ、既ニ最初ヨリ質入約定ノ手續ヲ經サル  
 者ニ付、現今訴出ルトモ、尋常ノ貸借ト見做シ、及裁判候テ可

然我此旨相同候以上

指令

明治六年七月以前満期ノ質地證文ハ、里正等ノ奥印ニ不  
 捺上ケ質地ノ裁判可及事、

第百六十七 地所質入ノ事

同上大分縣伺  
 七年八月二十二日指令

地所質入書入御規則御布告以前、質地年季ノ儀、本田畑ハ満  
 十ヶ年以上ノ年季ハ不相成、大繩田畑并山林屋敷地等ハ、當  
 管内舊縣々ニ於テ、適宜ヲ以テ二十年、或ハ三十年ヲ限リト  
 シ、又ハ數十年ノ永年季、永代賣買等、勝手ニ為致候縣モ有之  
 就テハ、昨六年太政官第百六十號地所質入書入規則第十五  
 條増補ニ、是迄質入書入云々、前約ノ年季据置不苦云々、右年

年季  
 季質地



季据置ノ儀、本田畑ハ滿十ヶ年以上、數十年ノ永年季ニ致シ  
居中、純出來、出訴ノ節ハ、貸入ノ年ヨリ滿十ヶ年ヲ過ル者ハ、  
流地糶賣等ノ處分ニ及、候儀ニ付、己ニ十ヶ年ヲ過ル者ハ、從  
前ノ約定ト雖、据置不相成儀ト相心得候得共、大繩田畑并  
屋敷地山林等ハ、前顯ノ通、舊縣々適宜ヨ以テ、永代賣、永年季  
貸入等勝手ニ任セ有之儀ニ付、右地所ノ分ハ從前ノ約定年  
季幾十年タリ共為据置若、年季明受返等ノ儀出訴ノ節ハ、明  
治六年太政官第五十一號御布告ニ依リ、處分致可然哉、此段  
相伺候也、

指令

大繩田畑等ニ限ラス、本田畑ト雖モ、年季ノ定メコレ有ル貸

地ハ、明治六年第十八號布告并増補第十五條ニ因リ、同年七  
月三十一日迄ニ、證書ノ改正ヲ為ス者ハ、總テ殘年季ヲ据置  
不苦、右改正ヲ經スシテ、同年八月一日以後ニ規則ニ觸レタ  
ル證書ヲ以テ、訴出タル者ハ、本年第六號布告ノ通り可心得  
將又流地糶賣ノ區別ハ、明治六年第五十一號布告并當省布  
達第四十六號ノ通可心得事、

第百六十八 丁卯前貸借書改ノ事 同上名東縣同  
七年八月二十二日指令

丁卯以前ノ無證據、金銀貸借、戊辰以後ニ至リ、證書出來候類  
ハ、戊辰以後ノ貸借ト者做シ、取上ケ可及裁判哉、此段相伺候  
也、

証文書  
改

指令



丁卯以前、無證據貸借ニテ、戊辰以後ニ證書出來タルトハ、其證書上丁卯以前借用ノ旨記載無之ハ、裁判官何ニ因リ、其丁卯以前ノ貸借タル事ヲ省認ム可キヤ、モシ證書上丁卯以前借用ノ旨記載有之カ、又ハ原被口供符合スルニ於テハ、無論裁判不及事、

第百六十九

年期明ケ受戻シノ事

同第百四十二号大分縣伺  
七年八月廿五日指令

本年四月十四日附ヲ以相伺候數箇條ノ内、第七條明治六年御省第五十一號御布達從前質地ヨリ起ル訴訟云々、年季別不受戻トハ、譬ヘハ云々ノ伺ニ去ル五月四日附ヲ以伺ノ通、但書事故ニ託シ云々、其確證ナキモノハ、本條ノ通ケルヘシト御指令有之、又御省日誌本年第五十一號山梨裁判所伺質

無年季  
受戻シ

地ヨリ起ル訴訟ノ儀ニ付明治六年第五十號御布告、及ヒ同年本省第四十六號御布達有之候處、譬ヘハ云々ノ御指令ニ満期ノ翌日ハ即チ受戻シヲ為スヘキ日ニ付當日中ニ金子ヲ返却スル者ハ、受戻サス可キ事トアリ、若シ其日ニ至リ、紛儀ヲ生シ、受戻ノ示談不<sub>レ</sub>相調、即日詠出ルルハ受戻サスルハ無論ナレ共、紛議中一日モ其日ヲ過ルルハ、受戻スヘキ權利ヲ失ヒタル者トスルキハ、縣廳遠隔ノ者ニ於テハ、即日ニ詠フルヲ得ス、遂ニ受戻スヘキ權利ヲ失フニ至リ、貧困ノ者益難澁<sub>レ</sub>カ<sub>レ</sub>ラサルヘシ、此ノ如キ八年季明當日ヨリ起算シ、一日八里程トシ、縣廳到着ニ當ル翌日ニ出詠スルルハ、猶受戻ノ權利ヲ失ハサル者ト看做スヘキ我、奉伺候也



指令

満期受返シヲナス懸合ニ及ヒ、紛議ヲ生シ、其紛議ノ為メ、期日ヲ過キ訴出ルトモ、受返シノ權利ヲ失ヒタル者ニ無之事、

第百七十 負債主承諾セサル利息ノ事 同第百四十四号、第百二十二号布達 七年八月三十一日

昨明治六年當省第四十三號布達ニ、左之通、但書ヲ相加、候條此旨布達候事、

但債主利息ヲ請求シテ、負債者承諾セサル時ニ限り、本文之處分ニ及フ可シ、若シ雙方示談整フカ、又ハ債主ニ於テ、請求ヲ為サ、ル分ハ、此例ニ非ス、

第百七十二 身代限ノ者貸金ノ御布達 同第百四十五号、第百二十三号布達 七年九月四日

金穀ヲ借り返濟ヲ為シ能ハサル者、裁判所ノ處分ニ因リ、身

負債者承諾セサル利息

身代限ノ者餘入金

代限ニ遭ヒ候トキ、所有物ノ内、他人へ貸附置キタル金穀ノ證文之レアル節ノ取扱、明治五年壬申第四十號ヲ以テ相違置候所、證議ノ次第有之、左ノ通、リ改正候條、此旨相違候事、

第一條

各裁判所ニ於テ、身代限ノ處分ヲ為スニ當リ、身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ、身代限ニ遭フ者ヨリ、他人へ貸附置キタル金穀ノ證文有之時ハ、其証文ノ定約期限ノ満未滿ヲ論セス、証文ニ記名シタル負債主へ、真偽ヲ尋子無相違時ハ、其負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨、身代限ニ遭フ者ノ債主へ申渡シ、別紙雛形ニ倣ヒ、証文ニ裏書ヲ為シ、其債主ニ可相渡事、

第二條



前條ノ場合ニ於テ、債主ソノ証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ、ソノ証文ハ身代限ニ遭タル者ニ、所持致サセ置ク可キ事、但シ定約満期ノ証文ニテ、負債主ノ家産些少ナルモ、身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ、ソノ負債主ノ身代限ヲ以テ、現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ、望ノ通り處分ス可キ事、

第三條

負債主數名ニシテ、身代限ニ遭フ者ヨリ、他人へ貸附置キタル金穀ノ証文一通、又ハ數通ナル時ハ、數名ノ債主へ入札致サセ、落札ノ金員ヲ以テ、其落札シタル債主ト、其他ノ債主トへ金高ニ應シ配當シ、ソノ落札ノ証文ニハ、一通毎ニ第一條

ノ方法ニ依リ、處分ス可キ事、

但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ、第三條ノ處分ニ及フ可キ事、

第四條

証文ヲ落札シタル債主、証文ニ記名シタル負債主ヨリ、金ヲ受取タルハ、其金員中ヨリ已レノ受取ルへキ金高ト、之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ、其餘金ハ証文ニ記載シタル債主ニ返シ、而シテ右ノ計算ヲ為シタル明細勘定書ト、餘金ヲ返シタル受取書トヲ以テ、裁判所ニ届出ツヘキ事、

第五條



若シ証文ヲ落札シタル債主、証文ニ記名シタル負債主ヨリ、  
金ヲ受取ントスルニ、証文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代  
限ニ遭ヒテ、証文ニ記シタル金員ノ全部、又ハ幾部ヲ返シ能  
ハサルキハ、証文ニ記名シタル負債主ヨリ、証文ヲ落札シタル債  
主ニ對シ、右ノ部分ノ金員ヲ、身代持直次第返濟スヘキ旨人、  
証文ノ裏書ヲ、裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事、

但此時、曩ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ、裁  
判所ニ於テハ、之ニ金員ノ差引ヲ記載シ、二通ノ証書ヲ一  
綴ニシテ下附スヘシ、

第六條

証文ヲ落札シタル債主、証文ニ記名シタル負債主ヨリ、金ヲ

受取ルヘキ期限ニ至ラサル時、証文ニ記載シタル債主、即チ  
曩ニ身代限ニ遭ヒシ人、己ニ身代ヲ持直タルキハ、直ニ其人  
ニ對シ、再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事、

証文裏書雜形

表書ノ貸主何之誰儀、年號月日身代限、申付候ニ付、此証文ハ  
入札ヲ以テ渡ス時ハ此間ニ入、某府縣管下某國某郡某村何  
札ヲ以テノ五字ヲ書加フヘシ、  
之誰ヘ相渡候條、此証書ノ金額ハ右何之誰ヘ濟方致候上、其  
段當裁判所ヘ可届出事、

年號月日

某裁判所印

第七十一

戊辰前後ニ係リタル頼母子講ノ事

同第四百七十七号栃木裁判所  
七年九月十日指令

爰ニ頼母子講ト唱ル集金取引ノ未違約ノ儀訴フル者アリ、

頼母子講



則其趣旨左ノ通

慶應三年十月發起一ヶ年兩度宛集會關引

一人數二十三人

此掛持寄金二百三十圓 但一人ニ付 金十圓

此内

金七圓 集會之節 賄料引之

金二十三圓 認人數へ平常 割戻シノ約

差引

殘金二百圓 關當ノ者 可受取約

但集會ノ節、關引ヲ以テ落口ヲ定メ、二會目ニ至リ候

得ハ、初會ニ關當リノ者ハ、二百圓ノ取金有之故、十圓

ノ掛金ヲ差出シ切ニシテ、關引ニモ加ラス、又二十三

圓ノ平常割モ受取ラス、關ノ當ラサル者へ割返シ候

等、每會皆如此、依テ落關ニ成ラサル者ハ、自ラ掛込金

へ、暗ニ利息ヲ生スルノ仕様ニ有之、

右ノ仕組ニテ、會主ノ外世話人有之、頼母子講ニ付テノ諸事

ヲ擔當シ、關引當テ候者ハ、滿會迄仕組通、掛金可致旨ノ証書

差入、金子受取來リ、既ニ明治五至中年迄、都合八會執行、候處

同年ニ至リ會主不如意ニ付、別紙議定書ノ通、別手段ノ無盡

金ヲ以テ返償ノ積、右世話人ヨリ關當リ無之者へ、証書差入

置候末、約定通不被相行候趣ヲ以テ訴出候儀ニテ、此証書文

中別手段云々有ツテ、其仕様ナク、若シ約ノ如クセサル時ハ、



請取書差出置候金高ヲ合算シ、二割ノ利息ヲ加ヘ、辯償云々  
有之迄ニテ、金額ナシ、其請取書ト稱スルハ、則頼母子發起以  
來世話人共ヨリ、連中へ渡置ク處ノモノニシテ、丁卯十二月  
晦日以前ヨリ以後ニ涉リ、掛込金ノ請取書ニ有之、此書類ヲ  
始テ合計ノ金、依テ尋常貸金ノ權衡ヲ以テ、丁卯以前ノ分ヲ  
差除キ、以後ノ分ヲ耳、右議定書ニ依リ裁判ニ及フ時ハ金額  
ノ計算ニ至リ、前後纏マリ申サス、自ツカラ幸不幸出來均シ  
カラサルニ甘キ裁判上不公平ニ有之、且右頼母子掛込金ノ儀  
暗ニ利息ヲ生スルノ仕様ニシテ、其根元丁卯以前發起セシ事  
件ニ付、以後ニ涉ルト雖モ、裁判ニ不及旨申渡可然裁ト存候  
へ共、為念議定寫之略相添、相伺候也、

身代限  
諸件

指令

原被告共、平民ナラハ、丁卯十二月前ノ當關ノ者ニ對シタル  
掛金延滞ノ訴訟ハ、受理スヘカラス、戊辰正月後ノ當關ノ者  
ニ對シタル掛金延滞ノ訴訟ハ、受理致ス可キ事、

第百七十三

身代限リ件々ノ事

同上兵庫裁判所伺  
七年九月十日指令

身代限ノ申渡ヲ受シ者ノ財產賣拂ハセ候節、賣拂ノ世話料  
及諸貼紙新聞紙ノ代料等、公正ノ入費ハ、賣拂代金ノ内ヲ以  
テ相拂ハセ可然裁、  
前同儕ノ申渡ヲ受シ者ハ財產ハ揭示期滿後三日內ニ賣拂  
候御規則ニ候得共、不動産又ハ動産タリ尺、河海船舶等ノ容  
易ニ賣買出來難キ財產ハ、持主ノ損失少キ為人、裁判官吏ノ

聽訟指

卷四



適宜ヲ以テ、一週日又ハ夫ヨリ多キ日數ヲ貼紙又ハ新聞紙ニ記載セシメタル上、賣拂ハセ可然哉、

前同斷申渡ヲ受シ者ノ財産賣拂ハセ候節、落札ハ若シ定期内ニ其金高拂方出來セサルハ、其落札者ノ引受ヲ以テ、更ニ入札拂等致サセ、假令最初ノ落札ヨリ低價ニ落札致シ候共、最初ノ落札高ニ至ル迄ハ、其者ニ償ハセ可然哉、右相伺候也、

指令

第一條 明治五年第三十一號當省布達訴訟入費償却規則ノ通可相心得事、

第二條 揭示期限滿後三日内ニ賣拂ノ規則トハ何等ノ規

則ニ基キタルヤ、身代限規則申記載アル賣拂前揭示日限ノ儀ニ之アルハ、右ハ物品賣拂ヲナスニ付、其賣拂ノヨリ三日間揭示スヘキ事ニテ、三日以内ニ賣拂ハキトノ一ニハ無之事、

第三條 評議中ニ付、追テ可及指令事、

第百七十四 賃地年季ノ事 同第百四十八号三指縣伺 七年九月十四日指令

賃地年季ノ儀ニ付、警前縣ヘノ御指令ニ基キ、本年五月十日付ヲ以テ擬議相伺候所、明治六年第十八號ヨリ本年五十二号迄ノ御布告ニ照準可致旨ノ御指令有之、然ニ右伺ノ儀ハ、年季一條ニ候間、癸酉第百六十七號ノ御布告是、迄賃入書入ニ致候分ハ、前約年季据置不苦ト有之候ニ依リ、縱令十五箇

賃地年季



年或ハ二十箇年ノ期限モ、前約ニ候ハ、其通り裁判可<sup>キ</sup>致事  
ト存セラレ候ヘ共、無年季ニテ金子出來次第可<sup>キ</sup>受戻旨ノ証  
書ハ、縦ヒ數十箇年ヲ經候共、出訴ノ日ヲ期限ト着<sup>キ</sup>做シ可<sup>キ</sup>然  
裁、或ハ十箇年過<sup>キ</sup>候ハ、質地ハ流地ト心得可<sup>キ</sup>然裁、此段相伺  
候也、

指令

明治六年七月三十一日迄ニ、無年季質地ノ証書書改メヲ願  
フ者ハ、三箇年季ニ改メサスヘキ筋ニシテ、已ニ六年八月一  
日以後ニ至リ、証書相改メスシテ訴ヲナス者ハ、本年第六號  
公布ニ據リ、尋常貸借ノ處分可<sup>キ</sup>及事、

第百七十五轉賣ノ事

同上敦賀縣伺  
七年九月十八日指令

轉賣

借入金ノ引當ニ書入シ財産ヲ、金主ヘ斷リナク他人ヘ轉賣  
セシモ、他ニ代用トナスヘキ物品所有ノ者身代限ノ節ハ、更  
ニ他品ヲ書入ト做シ引當ナキ債主ト別異シ、元利濟方申付、  
書入品ヲ他ヘ轉賣ノ慮ハ、不問ニ置候テ可<sup>キ</sup>然裁、  
右相伺候也、

指令

外債主同様金高割處分可<sup>キ</sup>及事、但轉賣ノ慮ハ斷獄課ヘ可<sup>キ</sup>  
廻<sup>ル</sup>事、

第百七十六

月賦金ノ事

同上愛知縣伺  
七年九月十八日指令

商人互ノ賣掛代金元金百圓ヲ、昨明治六年九月ヨリ、本年六

月賦金

月迄一箇月ニ金十圓ツ、ノ月賦濟約定イタシ候者、返金相



滞り、本年七月一日以後訴訟ニ及ヒ候モ、有レ之、右ハ明治六年九月ヨリ十二月迄、四箇月分金四十圓ハ、既ニ出訴期限ヲ過ギ候ニ付、濟方不申付、本年一月ヨリ六月迄ノ分金六十圓ハ、出訴限内ニ付、濟方申付候テ可、然哉、相伺候也、

指令

伺ノ通、

第百七十七

貢租未納身代限ノ事

同第百五十一号大藏省ヨリ問合書  
七年九月二十日回答

貢租未納ノ者、裁判所へ引渡候後ノ加息取立、方及ヒ身代限申付、不足相立候節、處分ノ儀ニ付、去月三十日御回答ノ趣了承致シ候、然ルニ利息ノ儀、身代限處分濟ノ日迄取立云々、御申越有レ之候得、共、貢租延納加息ノ儀ハ、項口申入置候通、五月

貢租未納

ハ半月分、其他ハ渾テ月割計等ノ成規ニ有レ之候間、身代限相成候分モ、其中渡濟ノ月迄、月割ヲ以テ取立相成候様致シ度、右ハ彼是區々ノ處分相成候テハ、不都合ニ被存候間、此旨尙御打合及ヒ候也、

回答書

去月三十一日附ヲ以テ、貢租未納ノ者身代限加息ノ儀ニ付、再ヒ御問合ノ趣、致承知候、右ハ裁判上ニ於テハ、利息月割定ノ分ハ、満月ヲ以テ之レテ、計等シ、未滿ノ日數ハ、總テ日割ヲ以テ致、計等候規則ニ付、右規則ニ觸レタル取扱ハ、出來不申、尤相對協議承諾ニテ、多少ノ取引有レ之ハ、裁判所ニ於テハ、不致關係候間、此段及御回答候也、



第百七十八 舊藩へ轉貸ノ事 同上愛知縣同  
七年九月二十二日指令

當縣管下尾張國愛知郡名古屋茶屋町南伊藤助九郎ヨリ、同  
門前町商高橋太助へ相掛ル貸金催促ノ訴ニ付、三重縣管下  
伊勢國桑名郡對海地新田白木吉十郎ヨリ、舊長島藩へ調達  
金ノ公債証書處分ノ儀、本年三月廿八日附テ以、相伺、候處、同  
年五月十五日御指令ニ、舊官員ノ奥書之レアルハ、証書上公  
債ノ明文之ナキ上ハ、証書面通り可及、裁判ト有之、右御指令  
ニヨリ、原告雙方取調中、三重縣ヨリ右吉十郎公債証書處  
分ノ儀、別紙甲印<sub>略</sub>ノ通大藏省へ伺、相成、別紙乙印<sub>略</sub>ノ通轉貸ノ確  
證明分ニ付、更ニ甲ノ金主へ公債一般ノ處分ニ可及云々御  
指令相成、且別紙丙印<sub>略</sub>ノ通當縣へ御達、相成候、依テ吉十郎

舊藩轉貸

手前、舊長島藩ヨリ取置候証書取、糾候處、別紙丁戌印<sub>略</sub>ノ通  
関戸誓太郎外三人宛名ノ証書ト、同人外二人名宛ノ証書面  
ニテハ、吉十郎ト藩トノ間ノ証據ニハ、太助ヨリ借入レ藩へ  
轉貸ノ儀、明分ニ候ヘ、吉十郎ト太助トノ間ノ証書ハ、全ク  
相對私借ニテ、只藩ノ藏米切手ヲ引當ニ致シタル迄ニテ、公  
債ノ明文之レナキ上ハ、御省御指令通、處分可、致儀トハ存候  
ヘトモ、前條ノ如ク一事兩段ニ涉リ候テハ、處分難、相成、且昨  
明治六年九月中、太助ヨリ吉十郎へ掛リ、右一件訴訟ニ及ヒ、三  
重縣於テ取糾中、熟議解訟イタシ、其節元金二千圓ノ内、當金  
五百圓既ニ吉十郎ヨリ太助へ返辨ノ分モ有之、即令金二千  
圓ノ株、太助へ公債一般ノ處分ニ及ヒ候テハ、右受取金ハ如



何取扱候テ可然哉、此段相伺候也、但シ先般伺書御指令面ニ、舊官員ノ與書等之レアルト有之、右ハ舊藩藏米切手ハ舊官員連名ノ預リ主ニテ、舊官員ノ與書有之候ヘ、告十郎ヨリ太助ヘ相渡シタル証書ノ與書ハ、関戸警太郎外二名トモ、舊官員ニアラズ、平民ニテ有之候、此段申上添候、

指令

尾張國愛知郡名古屋茶屋町商伊藤助九郎ヨリ、同門前町商高橋太助ヘ掛ル貸金ノ儀、大藏省公債ノ處分ヲ受タルハ、雙方熟談承諾ノ上ナル可シ、然レハ其取引濟ノ五百圓ノ金高差引ノ一モ、相對ニテ熟談整フ筈、若シ熟談整ハズ、金主於テ公債ノ處分ニ不服ヲ唱ヘ、訴訟及フ時ハ、裁判上ニ於テ、先指

懲役人  
貸借

令ノ通、處分致ス外、別ニ處分ノ道ハ之レナキ儀ト可相心得事、

第七十九

懲役人貸借ノ事

同第五百五十二号東京府伺  
七年九月二十二日指令

懲役人ノ内ニハ、兼テ他ニ係ル金銀貸借等ニ付、其親族ヨリ掛合ニ及フト雖モ拂方無之ヨリ、裁判所ヘ出訴ノ際、委任狀受、度願出候者有之、監獄則ニ於テ書信出願ハ、獄司調査ノ上印紙ヲ以テ往復披見濟、廳ヘ止、置候所、右委任狀ノ如キハ、同途ニ難見做譯ニ付、當人取、糾委任狀相渡、度旨申立候ハ、願人御規則ノ印紙持、忝申付、本人自記為致、下ケ渡候テ不苦哉、相伺候也、

指令



懲役中ノ者ハ、委任狀ヲ渡ス權ナシ、依テ金銀借貸訴訟等ノ儀ハ、其ノ家族或ハ親戚ノ内ニテ、取計ヒ可然事、

第百八十

身代限リ件々ノ事

同第百五十四号島根縣伺  
七年九月二十五日指令

身代限  
件々

嗣子、其父ニ告ケス、密ニ負債ヲナシ、返償スルヲ得サルハ、其一身ノミ身代限、申付、若不足アルキハ、成規ノ通、証書へ裏書致サセ置キ、其戸主トナルヲ待テ、不足金ヲ濟方為致可然裁、

二三男又ハ厄介タルノ時、負債ヲナシ、返濟難出來終ニ身代限、申付ルニ、不足金アルヲ以テ、成規ノ通、証書へ裏書致サセ置ニ、數年ヲ經テ其二三男、他姓ヲ相續シ、戸主トナレハ、矢張身代ヲ持直ス者ト同ク、前不足金ヲ償却可為致儀ニ候裁、

妻其夫ニ告ケス、密ニ負債ヲ為シ、返償スルヲ得ス、依テ身代限、申付ルキハ、厄介人ト同ク、其一身ノミ及處分候テ可然裁、  
甲乙ヲ保証トナシ、金ヲ丙ニ借リ、期ニ至テ返償スルヲ得ス、依テ先ツ甲ヲ身代限、申付ルニ若干ノ不足ヲ生ス、其証書ニ明文アルヲ以テ、保証タル乙へ辨セシム、然ニ後數年ニシテ甲身代ヲ持直スト雖モ、乙へハ返償難為致筋ニ候裁、既ニ身代限申付不足スルキハ、其子孫ニ至ル迄身代持直シ次第濟方申付ヘキトノ公布アルヲ以テ考レハ、乙ノ辨償金ハ、證書ニ為致置キ、甲身代持直次第、乙へ濟方可為致裁、  
負債主身代限申付、不足アレハ、其子孫ニ至ル迄示々ト之ヲルヲ以テ、曾孫玄孫ニ至テハ、假令身代持直ストモ、返償スル



ニ不及裁、右相伺候也、

指令

第一條 必ス戸主トナルヲ待ニ及ハス、一身ノ所持物出來  
次第濟方致サスヘキ事、

第二條 二三男又厄介人他姓ヲ冒シ、戸主トナリタルハ  
乃チ該家ノ財産ヲ專有スヘキ者ニ付、自己ノ舊債ト雖モ、  
直ニ其專有スル所ノ財産中ヨリ償却可申付事、

第三條 伺ノ通

第四條 借主ト保証人トノ間ノ取引約定等ハ、其雙方ノ者  
協議ニ任スヘシ、若シ協議整ハスシテ訴訟ニ及フキハ、口  
書ヲ以テ、可伺出事、

第五條 曾孫玄孫ト雖、モ其名跡相續シタル者ニハ、返償可  
申付事、

地所貸入  
小作滞

第百八十一 地所貸入ニ付テノ事

同上新治裁判所伺  
七年九月二十五日指令

従前地所貸入ニ致置年期中ノ分昨明治六年第十八號貸入  
書入規則ニ照準シ、同年七月限り可書改答ノ處半關置右規  
則ニ相觸候庶ヲ以テ、即令書改メテ訴出ル者有之候得共、已ニ  
其期限ヲ過ルヲ以テ、不取揚追テ年期限後訴出候節ハ、本年第  
六號御布告ニ依リ、貸入又ハ書入ナキ尋常貸借ノ裁判ニ及  
ヘキハ勿論ニ候所、右賃地ノ權利ヲ失ヒシ者直小作証文取  
置年期中小作米金ノ滞リ訴出候節ハ、既ニ賃地ノ約定消滅  
ニ從ヒ、小作ノ約定モ消滅スル筋ニテ、不及裁判可然裁、然モ



貸金モ年期後ハ尋常貸借ノ裁判ニ可及モノニテ尋常貸借  
トテモ無利足ノ筈無之筋ニ付右小作米金ヲ利息ト見做シ  
年期中ノ帶ハ取揚及裁判可然哉相同候也

指令

明治六年七月迄ハ小作証書ノ通り辨濟サセ同年八月以後  
ハ尋常貸借ノ處分ニ及フ可キ筋ニ付小作ノ淹滞等ノ訴ハ  
受理ス可カラス尤舊約満期ニ至リ金子返濟ヲ訴ルニ於テ  
ハ八月以後ノ分ハ元金ニ百分六ノ利息ヲ加ヘ返濟致サス  
可キ事但シ明治六年八月一日後ナレハ証文書改ヲ為ス  
テ願ノ權利ハコレナシト雖モ將來三年以内ノ質地証文  
ヲ求ルノ權利ハコレアル可キニ付金主於テ改テ新規質入

印ヲ詐偽  
シタル  
借

証文ヲ求ルニ借主從ハサルヨリソノ証文請求ノ訴訟ヲ為  
スハ格別ノ事

第百八十一 他人ノ印ヲ詐偽スル事 同上和歌山縣伺  
七年九月二十七日指金

金銀借用証書面ニ擅ニ他人ノ姓名ヲ記載シ加判人トナシ  
其下へ自分有合ノ印形ヲ捺用シ金ヲ借得ル戸長アリ畢竟  
財ヲ詐取スル心無シト雖モ其職務戸長タルヲ以テ外聞ヲ  
憚ルヨリ爰ニ至ルト雖モ其金既ニ債主へ返濟否ニ不拘其  
罪ヲ偽造私印律ニ擬斷致シ可然哉

指令

私ノ文書ヲ詐為スル者不應為ニ問テ情ヲ量リ輕重ヲ分ツ

第百八十二 年月日書改メノ事 同第百五十六号三藩縣伺  
七年九月二十九日指金



年月日  
略記

癸酉第百十二號御布告ニ、七月十日以後ノ証書類、年月日ノ内何レヲ略記シタルモ、裁判上証據ニ不相立云々、右ハ不  
及裁判儀ハ勿論ノ能ニ候得、共、年月日略記ノ處、書改ノ儀  
訴出候節ハ、裁判可致筋ニ候裁、或ハ御布告ニ有之處、疎漏ニ  
シテ請取候儀故、猶不及裁判儀ニ可有之裁、

指令

詮議ノ次第有之、追テ可及指令事、

第百八十四 預リ金穀ノ事

同第百五十九号若松縣同  
七年十月五日指令

華士族卒ハ、掛候金穀貸借ノ儀ニ付、壬申第百三號御布告ニ  
基キ云々、同年十一月御省第四十一號第ニ條ノ中、全ク預金  
穀ニテ、利足禮金等ヲ受サル分ハ可及裁判、若其金穀ノ費用

預リ金穀

シ、濟方不増明時ハ、漸獄課ハ引渡ス可キ旨御達有之候處、元  
會津藩ノ如キ、一旦亡國ニ相成、當時斗南ニ移住シ、或ハ管下  
ニ歸農スル者、皆無禄無産活計ノ立可キナク、頗ル艱難ヲ極  
候、然ルニ戊辰以前、他人ノ金穀ヲ預リ、自ラ費用スルニ非ス  
ト雖モ、騷擾ノ際保護スル能ハス、或ハ灰燼ニ属シ、或ハ掠奪  
ニ遭ヒ、家産悉ク亡滅シ、僅ニ一身ヲ存スル耳、今日ニ至リ其  
預金ナルヲ以テ、返辨ヲ促シ公裁ヲ乞フ者アルモ、固無禄無  
産目下凍餒ニ迫ル、何ヲ以テ之ヲ辨償スルヲ得ン、而シテ其辨  
償セサル者刑法ヲ以テ處斷スルハ、酷ニ過ルニ似タリ、實  
ニ惘然ノ至ニ候條、當縣貫属元會津藩ノ如キハ、他ノ比較ス  
可キ無キヲ以テ、假令預ケ金穀ト雖モ、士族卒ニ係リ候分、再



立以前ハ裁判ニ不及様仕、度相伺候也、

指令

封ノ儘預リ置カ、又融通使用ヲ為サ、ルノ明文アル預金穀  
ハ、則テ物品ヲ預リタルモ同様ノ譯ニテ、右等ノ約定ニテ金  
穀ヲ預リタル者拒ク可ラサルノ災害ニ罹リ、其金穀ノ流亡  
燒失ヲ為シタル時ハ、返償ノ義務モ消滅ス可キ筋ニ付、右明  
文アル預ケ金穀ニテ、拒ク可ラサル災害ノ為メニ之ヲ失ヒ  
シ証跡明確ニテ、タトヘハ金穀ヲ預リタル者、舊會津明治元  
年辰九月戦争前ニ金穀ヲ預リタルマ、融通ヲ為サ、ルニ  
俄ニ戦争ノ災害ニ罹リ、兵亂火災等ニテ、預リ金穀ヲ失ヒタ  
ル分ハ、之ヲ償フニ及ハスト雖モ、右明文ナクシテ、其融通ヲ

黙許、又ハ明許シタル分ハ、假令金穀ヲ預リタル者金穀ノ融  
通ヲ為シタル後、不幸ニシテ災害ニ罹リ、赤貧ニシテ些資ナ  
キニ至ルモ、預リ金穀ヲ返スヘキ義務ヲ免ルヘキ道理ハ之  
ナキニ付、至申第四十一號當省布達第二條、并本年第二十七  
號布告ニ照シ、處分致ス可キ事、

第百八十五 家禄渡シ次第返金ノ事 同第百六十号石川縣伺  
七年十月五日指令

家禄ヲ以  
テ返濟

明治五年壬申三百號御布告中、従前今後共家禄ヲ引當ニ致  
シ候金穀貸借ノ儀ハ、一切裁判ニ不及ト有之、然所右御布告  
後ニ至リ、金穀貸借証文中、當幾月家禄渡リ次第、或ハ渡ル毎  
幾度ニ返濟可及旨、記載候証書ヲ以テ、及、由訴候向往々有之、右  
ハ家禄ヲ以テ返濟可及トハ無之候得共、矢張引當ト見做シ、裁



判ニ不及裁、亦ハ家禄渡リ云々ノ文言ハ、返濟期限ト見做シ  
裁判致シ可然裁、相同候也、

指令

家禄渡リ次第、或ハ家禄渡ル毎ニ返濟可致トノ文意、乃チ家  
禄ヲ引當ニシタルトニ無之シテ、其家禄渡リ日ヲ以テ、返濟期  
限ヲ約シタル者ニ付、採上ケ裁判可及事、

第百十六

便利ニ任セタル質入レ證書ノ事

同第百六十一号名東縣伺  
七年十月八日指令

地所質入書入御規則第九條ニ、戸長ノ與書并ニ割印ナキ證  
文ハ、貸付ノ證據ニ不相成ト有之、爰ニ人民相互ノ便ヲ以テ、  
一時ノ急ニ充ル為メ、金穀借用ノ證文之略ヲ作り、萬一返濟差  
支候節ハ、地券書換、或ハ書入証文ニ作ル云々ノ文言ヲ加ヘ、

質入ニ連テ  
ハキ証文

金主地券ヲ預リ、而メ戸長ノ與書割印ヲ受ケス、私ニ貸借ヲ  
為スモノアリ、右ハ第九條ニ背戾スルヲ以テ、即チ貸付ノ証  
據ニ不相立、取揚裁判ニ不及候哉、又ハ質入書入ノ本法ヲ盡  
サ、ルヲ以テ、其地ヲ取引、或ハ糶賣ヲナス權利ナシト雖モ、  
貸借スル所ノ金穀ハ互ニ受取差戾ノ權利義務アルヲ以テ、  
唯貸金穀ノミ取揚身代限迄ノ處分ニ及ヒ可然裁、相同候也、

指令

明治六年八月一日以後ニ、約定期限ノ係ル者ハ、本年第六號  
公布ノ通尋常貸借ノ處分可及、若、同年七月三十一日以前ニ、  
期限ノ切タル分ハ、証書面ノ通り、裁判可及事、

第百八十七

預リ金穀ノ事

同第百六十六号司法裁判所伺  
七年七月十三日指令



預金

本年第二十七號御布告、預金敷ハ其証書中、封印ノ儘、預リ置  
カ、或ハ預リ中融通使用ヲ為シ、ルノ明文ナキ分ハ、五月一  
日以後ハ、貸金同様ノ裁判可致ト之アリ、五月一日前後ノ証  
書ニ因リ、別段處分ノ區別明文無之ニ付、無論其分別ハ之ナ  
キトト相考ヘ是迄各裁判所等ヨリ、伺出ノ節ハ、別段御輔公  
ノ決裁ノモ受テス、別紙ノ通、指令致來候處、今般新瀉縣ヨリ  
控告ノ事件モ有之候間、一應相伺候也、

〔別紙指令書〕

本年第二十七號布告ハ、裁判上結局ノ處分ヲ定クル者ニ  
テ、壬申三百號同三百十七號布告ノ期限ニ因リ、採用不採  
用ノ區分ヲ論スルニ之ナキニ付、右壬申兩布告期限前

貸入地

ノ預金敷訴訟採用不採用ノ儀ハ、壬申四十一號當省布達  
第二條ノ通、可相心得事、

指令

伺ノ通

第百八十八 塩濱貸入ノ事

同第百六十八号廣島縣同  
七年十月十四日指令

當縣管下備後國甲奴郡上下村農田邊長一郎ヨリ、同御調郡  
三原町前山科常右衛門等ハ相係リ候、貸金出入ノ訴取糾候  
所、貸借ノ儀ハ、慶應三年丁卯前ニ在テ、明治元辰年十二月改  
替、別紙証書ノ通、候得共、沽券証債主所持不致ヨリ、貸入ノ  
規定ニ抵觸致居、去書面上地所債主引受、年季中繰入モ附  
置、運上等差出候儀ニ付、書入証書トモ難見做、元來沽券証ハ、



從來地主於テモ所持不仕ヨリ、債主モ受取候業難、出來、畢竟  
舊藩中、各郡多ハ沽券証無之慣習ニ付、右田邊長一郎沽券証  
無之トモ、書面上地所引受候上ハ、質入ト見做シ取上及、裁判  
候テ可然哉、此段相伺候也、

〔別紙〕

質地証文ノ事

一金二千兩

此質物ニ 古濱九箇所一番ヨリ九番迄

在來建物并濱附 但諸道具一切不殘

別紙繪圖面之略通

右ハ私等所持書面ノ塩濱、今般貴殿ハ質物差入、金子借用

申處實正也、年季ノ儀ハ、當辰十二月ヨリ來酉十一月迄、凡  
五箇年季ニ相定、年季明同十二月ニ至、金子相違ナク相渡  
可、中候、尤年季中御運上ノ儀ハ、貴殿方ニテ御勤可、被成候  
萬一期月ニ至リ、元金返濟及、遲滯候ハ、可致流地、其期ニ  
至リ、右地所ニ付、一言ノ故障申入間シク候、為後日濱持主  
連印証文相渡、置候所、依テ知件、

明治元辰年十二月

質地主

山科常右衛門印

外 敷 名

田邊長一郎殿

塩濱稼掛請證文ノ事

一古濱九箇所



但繪圖面之略通、在來建物 濱附諸道具一切

此稼料一箇年分 金二百八十五圓也

右ハ書面ノ塩濱、當辰十二月ヨリ來ル酉十一月迄、五箇年  
季相定、私共掛受相稼候ニ付、來巳年ヨリ右定ノ掛料年々  
十一月晦日限、急度可相濟、若滯候ハ、引受人ヨリ辨濟可  
致候、尚右地所御取戻ニ可被成候其節、異論申間敷候、且掛  
請中諸造作ハ不及申、痛所等ノ臨時入用、何程相掛候共拙  
者共、致構貴殿、少モ御出金御迷惑相掛不申約定、為後日塩  
濱掛請証文依テ如件、

年號月日名前略之

指令

戊辰以後地所ト建物等ヲ令セテ、一紙質入証文ヲ差出シ、更  
ニ稼掛請証文ヲ入レ、借金主ニ於テ相稼タル者ナレハ、即質  
入ノ手順ヲ運ビタル者ニ付、其原丁知以前ニアリト雖モ、交  
理スヘキ筋ナレバ、地所ノ儀ハ、明治六年布告第十八號ノ規  
則ニ觸レタル証書ニ付、本年第六號布告ニヨリ、質入レノ權  
ヲ失タル者ナリ、尤地所ニ附在セル建物諸道具等ハ、右規則  
ニ關係之ナキ者故、依然質入ノ權ヲ有セルコトニ付、其建物等  
雜賣代價ヲ以テ償却サセ、若不足之アルキハ、身代限迄ノ處  
分可及事、

第百十九 身代限リノ者月賦等貸金ノ事 同第百七十二号京都裁判所伺  
七年十月二十二日指令

本省本年廿三號布達第四條ニ、證文ヲ落札シタル債主、証文

身代限ノ者  
月賦等ノ  
貸金



ニ記名シタル負債主ヨリ、金ヲ受取タルキハ、其金員中ヨリ、  
己ノ受取ヘキ金高ト、之ヲ受取ニ付テノ諸入費ノ金高トヲ  
引去、其餘金ハ証文ニ記載シタル債主ニ返シ云々トアリ、此  
ハ數名ノ債主アリテ、負債主身代限ヲナスキヲ云フ、假令一  
名ノ債主ヲ以、金額百圓ノ返濟ヲ求ムルニ、負債主之ガ為ニ  
身代限ヲナスル、年賦月賦等ヲ以テ、他人ハ貸付置タル金額  
三百圓ノ證文之アリテ、其糶賣物品代價僅ニ十圓ニ滿サル  
ニ於テハ、其九十圓餘ノ不足分ハ、三百圓ノ証文ヲ債主ニ受  
取ラセ、債主其証文ニ記名シタル負債主ヨリ、年賦等ノ金額  
逐次ニ之ヲ受取り、全ク其不足分ト、其之ヲ受取ニ付テノ諸  
入費トニ充ルニ於テハ、其証文ハ身代限ニ遺タル前ノ負債

主ハ差戻スヘキ旨申渡、雖形ニ假ヒ、証文ニ裏書ヲナシ可然  
裁、

負債主償却ヲナス能ハサルキハ、請人ヨリ代償スヘクトノ  
明文アル證書ヲ以テ、金穀ヲ貸借シ、其負債主之カ為ニ身代  
限ヲナスル、他人ハ貸付置タル金穀ノ証文アリト雖モ、債主  
ニ於テ、其証文ヲ請取ルヲ好マサルキハ直ニ請人ニ向テ、  
其不足金ノ償却ヲ求ムルヲ得ヘキ裁、此段相伺候也、

指令

二條共同之通

第百九十

通行外國人貸借ノ事

同上水澤縣伺  
七年十月二十日指令

內務省本年乙第五十號達、有之ニ付テハ、外國人民何レノ地

通行外國  
人貸借



方ヲ論セス、何時通行何日滯泊可及歟モ難計、若シ右通行滯泊ノ際、金銀貸借、又ハ商業取引ノ事ニ付、紛議ヲ生シ、外國人ヨリ内地人民ヲ相手取テ、或ハ内地人民ヨリ、外國人民ヲ相手取、該地方廳へ訴出ル時、外國人取扱ノ儀ハ、明治六年第一百五號御布告ニ照準、該廳ニ於テ准判可致哉、同年第一百八十九號御達、外國人民ヨリ、我國人民ニ對スルノ訴訟ハ、勿論司法省ニ於テ裁判可致云々ト有之ハ、假令瑣細ノ事件、タリ、且御省又ハ最寄地方裁判所へ差出シ可申哉、

指令

外國人民ヨリ、内地人民へ對スル訴訟ハ、開港場及ヒ開市場ニ於テ始審裁判可及ニ付、地方廳ニ於テハ、右等ノ事件關係

無之儀ト、可相心得事、

第一百九十一

小作滞り家屋貸賃ノ事

同上山梨裁判所伺  
七年十月二十日指令

負債者身代限ノ節、債主ノ内小作滞、或ハ土地家屋ノ貸賃滞ノ償却ヲ求ント訴ル者ハ、尋常ノ貸借金ト異リ候間、特權有之者トナシ、財産分派ノ時、先償ノ處分ニ及ヒ候テ如何可有之哉、相伺候也、

指令

尋常貸金同様、配賦スヘキ事、

第一百九十二

赤貧文盲人借金ノ事

同上敦賀縣伺  
七年十月二十日指令

甲某ヨリ乙某ヲ相手取り、貸金催促ノ訴ヲ為スニ付、乙某ヲ呼出シ推糾スルニ、貧窮無産ニシテ、代書料ハ勿論、一紙ヲ買

極貧人  
文盲

小作屋賃



資力ナク、親戚朋友隣保ノモノモ、悉ク無筆文旨ニシテ、名前書スラ難認旨届出ルモノ有之、事實取調無相違時ハ、如何取計可然哉、奉伺候也、

指令

伺ノ通りノ事件之レアリ、事實相違無之時ハ、其旨口供ヲ取リ、押印致サセタル上、裁判官ノ見込ヲ以テ、相當ノ處分可及事、

第百九十三

貸金名目ノ預ケ金ノ事

同上若手縣伺 七年十月二十日指令

壬申第四十一號御布達第二條、預ケ金穀ハ証文面預ケ金穀ノ名目ニテ利息有之、亦ハ預リ人融通セシムル庶ヲ以テ、禮金ヲ受ル分ハ、第一條ノ通、心得ヘク、尤全ク預金ニテ、利息禮

貸金名目ノ預金

金ヲ受ケサル分ハ、及、裁判云々ト有之、利息禮金ノ有無ヲ以テ、取捨ノ區分相立候儀ニ付、成規年月日以前ノ金穀貸借モ無利息ニ候ハ、預ケ金同様取上ケ及、裁判可然哉、相伺候也、  
指令

無利息ト雖モ、貸借ノ名目アル金穀ハ、採上裁判不及事、

第百九十四

貸借諸件ノ事

同第百七十四号秋田縣伺 七年十月二十四日指令

數重ノ書入

一箇ノ動産不動産ヲ數重ニ書入レ致スモノアリ、譬フ甲ハ前借ニシテ一月十五日、乙ハ後借ニシテ、一月十日ヲ以テ期トス、右負債主身代分配ノ法、甲ハ初度ノ書入ナルヲ以テ、債主ニ於テ先取ノ特權ヲ有スルモ、乙丙丁ハ數重書入ノ情ヲ知ラスト、雖モ、他ノ諸債主ト同一ニシテ、其特權ナキ儀ニ候



裁

前條負債主ノ如キ、既ニ身代限裁許ニ及フト雖モ、其數重書入ヲナス、固ヨリ詐欺ノ罪問ハサルヲ得ス、依テ斷獄課ヘ廻シ、處斷致シ可然裁、但シ斷獄ニ於テハ初度ノ書入ヲ除ク外、其餘ハ賍ニ計ヘ、詐欺取財律ニ依リ候裁、

甲ハ前借ニシテ一月十日、乙ハ後借ニシテ一月十五日期トナスノ類、其意前借ヲ十日迄ニ濟方スレハ、後借ノ書入ニ於テ不都合無之、逆始ヨリ詐欺ノ心情絶無ノモノト雖モ、遂ニ前借ノ期ヲ失フヨリ、後借ノ期ニ抵觸シ、且其前借期限未タ満スシテ、又後借ニ書入スルモノ、是亦前條ノ通、心得可然裁、

舊藩縣ニ於テ既ニ裁許ニ及ヒ、其節受書差出モノ、今日ニ至

リ不服ノ訴ヘ再訴致ト雖モ、動産不動産ヲ不問一切不取揚方ニ候裁、

前條ノ通ノ手續ナレバ、其節受書不差出モノハ、昨六年訴答文例御施行以前ハ、控訴期限ニ無之儀ニ付右文例施行當日ヨリ三月以内、再訴致候者ハ文例第四章二十條ニ照シ、取揚可然裁、

茲ニ熟田アリ、甲ノ進退スル云々、再申ノ件ニ付略之、

貸金証文宛所、其姓ヲ記シテ名ヲ不記、或ハ屋號ノミノ類、既ニ負債主ニ於テ、内金等相渡シ、其債主タルハ分明ト雖モ、不取揚方ニ候裁、

年月日  
書改メ

昨六年七月十日後、證文上年號月日イッレモ略記スルハ、裁



判上証據ニ不相立ハ、公布ノ通リニ候ヘ尺、右証文一旦其筋へ差出<sup>ス</sup>未<sup>ズ</sup>負債主ニ於テ月日等脱漏ノ庶不都合ナリ迎更ニ加書シテ債主へ相渡モノハ、事實無據儀ニ付証據ニ相立可然哉、

祭料取戻シ

寺院所有地ノ内、祖先ノ祭祀料或ハ堂宇修繕ノ資金ニ付寄附田畑ノ儀、後世ニ至リ異論ナキ為人、証書渡置キ、其寺院ニ於テ、地所進退致居候所、當今ニ至リ、神葬祭相用、向後僧侶ノ祭祀ヲ不仰トテ、右寄附人ノ子孫其地所ヲ引戻候儀出訴ニ及フト雖モ、右証文面永代寄附田ノ儀判然タル上ハ、其子孫ニ於テ引戻可キ權無之儀ニ候哉、相同候也、

指令

第一條 第一番ニ甲へ元利ノ金數ヲ渡シ、餘分アルハ、乙へ引渡ス可シ、若シ不足ナルハ、其不足ノ分ト、丙丁ノ貸

金高ハ、書入ナキ債主ト同一ノ割賦ニ致ス可キ事、

第二條 証書中ニ二重書入レ無之等ノ明文有之類ハ、伺ノ通<sup>リ</sup>、<sup>レ</sup>獄課ニテ處斷致ス可ク、書入ニ為シタル迄ノ証書ニ之レアラハ、負債主身代限迄ニ止ムヘキ事、

第三條 第二條ノ通<sup>リ</sup>、可心得事、

第四條 事實ヲ以、可伺出<sup>ス</sup>事、

第五條 伺ノ通<sup>リ</sup>、

第六條 乙於テ甲ノ祖先ヨリ永代賣渡シノ証書ヲ所持シタルノミニ、其地所ノ義務等、今日ニ至ル迄、更ニ關係致サ



ル一ニ候哉、右賣渡証書寫ヲモ添、尚可伺出事、  
第七條 姓又ハ屋號ノ、証書ト雖モ、取上裁判致ス可キ  
事、

第八條 伺ノ通、

第九條 祭祀料ノ名目ヲ以テ、寄附シタル田地ニテ、其寄附  
人ノ子孫ヨリ、引戻ノ訴訟ヲ為スルハ、取上苦シカラサル  
事、但堂宇修繕ノ為メ、永代寄附シタル分ハ、此限ニ非ラ  
ス、

第百九十五 質入レ書入レノ事 同上山口縣伺 七年十月二十四日指令

壬申十月二十一日太政官第三百十七號ヲ以テ、金穀貸借慶應  
三年丁卯以前ニ係ル者ハ一般裁判ニ不及云々御布告有之

質入書入

同年十一月本省四十號ヲ以テ、太政官三百號ノ御布告ニ基キ  
可心得旨、御布告ノ内、第十條動産不動産ノ債主ニ質入シタ  
ル者ハ、取上裁判可致ト有之、但書ニ沽券狀ヲ債主ニ渡シ、金  
穀ヲ借用セシ者モ、本條ニ準シ、質入ト看做スヘクト有之、右  
ハ華士族卒ハ係ル金穀貸借、明治二年己巳六月廿五日以前  
ノ分ハ、該ハ候儀ト相見候、然ルニ縣内人民總テ沽券狀并ニ  
証文ニ、庄屋畔頭ノ奥書印章ヲ取り、債主ニ相渡シ、年貢ノ儀  
ハ負債主ヨリ納メ、加調ニ該ル所ハ、年月何歩米ノ利子ヲ出  
ス、地所ノ質入ト心得、従前取結來リ候所、當時ニ比較仕、書  
入ト看做ス取上候時ハ、一統ノ枉屈不少候、然ルニ明治六年  
一月第十八號御布告地所質入規則第十四條ニ、質入書入等



七月限り証文書改候様被仰出候所、其前ヨリ負債主遠路他  
行又ハ事故アリ、期限マデニ証書改正不得仕者ノ儀ハ、前條  
第十條但書ニ照準シ、平民丁卯以前貸借出入ノ儀モ、沽券狀  
ヲ債主ニ渡置候以上ハ、入貸ト者做シ、取上裁判致候様仕度  
候、  
丁卯以前ニ係リタル金穀取引ヲ、戊辰正月後ニ至リ、更ニ利  
子ヲ付貸借ノ及、約定、新証文ニ書改タル貸入書入ヲ以テ、訴  
出候分ハ、取上裁判不苦候哉、相伺候也、

指令

第一條 約定年李明治六年八月以後ニ渉ル者ニシテ、同年  
十八號布告ノ規則ニ觸タル証書ヲ以テ、同年八月以後ニ

訴へ出タル分ハ、本年第六號布告ニ因リ、可處分事、

第二條 新証文面、丁卯前ノ貸借タル事分明ナルカ、又ハ原  
被口供上ニ相分リタル者ナレハ、現ニ質物ヲ入レタル分  
ハ、受理ス可シト雖モ、書入レノ分ハ、受理不<sub>レ</sub>及事、

第百九十六

舊藩貸下ケ金アル身代限ノ事

同上滋賀縣伺  
七年十月廿四日指令

上納金元  
身代限

舊藩々ヨリ人民へ貸下有之候金子ハ、明治六年第八十一號  
公布ニ因リ、人民相互ノ貸借トハ別種ノ者ニ付、丁卯以前ト  
雖モ、裁判可相成筋ト心得可然哉、

右公布ニ因リ、夫々取立候所、速ニ上納不致者有之節ハ、地方  
長官原告人トナリ、裁判所へ及出訴候筋ト存候、然所當縣ノ  
如キ、未夕裁判所不被置箇所ハ、自ラ告テ自ラ裁判スルノ姿



ニ相成、不体裁ノ儀ト存候、此等ノ事件ハ、長官ヨリ司法裁判所へ致出訴可然儀ニ御座候哉、

右ノ負債主外取引事件ニ付、當縣ニテ身代限申付候節ハ、假令前條ノ手續ヲ以テ、司法省裁判所へ及出訴候共、身代限割賦金配當ノ儀ハ、當縣ニテ取扱ハサルヲ得サル様ニ相成、此亦自ラ告テ自ラ配當スル姿ニテ、不体裁ト存候、如何相心得可然哉、

右配當金ハ、人民相互貸借割賦ノ規則同様相心得可然哉、右相伺候也、

指令

第一條 伺ノ通、

第二條 三條 當省裁判所ニ訴出ルニ不及、總テ其應聽訟課ニ於テ處分スヘキ事、

第四條 伺ノ通、

第百九十七 貨物臺帳ノ事 同第百七十五号島根縣同 七年十月廿四日指令

貨物臺帳

証券印稅規則第三則第一條 第二類諸帳簿種類ノ内、貨物臺帳ハ、貨商ノ者店方ニ備置日々出入取引等、相記シ、自家記臆ノ為ニ相設候品ニテ、他商ノ當座帳附込ノ類ト同一ニ可有之、是ヲ以テ証左トシ、公裁ヲ乞フノ具トハ相成間敷、假令貨客ノ調印無之、分ニテモ、成規ノ通、印紙貼用為致、後日明証ト相成候事ト相心得可然哉、昔、本年八月十七日大藏卿へ相伺候處、臺帳ノ儀ハ、假令自家記入候共、全体貨客証文替リ調



印可致帳簿ニ付規則ノ通、印紙貼用可為致旨、本月十五日指  
 令有之候處、固ヨリ質商ノ儀ハ、主客共最前相當ノ約束ヲ定、  
 請人ヲ立候上、一々証書差入取引致シ候正理ニハ候ヘ、モ  
 貧小ノ者衣服什具等ヲ典却候者ニ至テハ、其事ノ小ト、其用  
 ノ急ナルニ仍テ、全正理ノ如クナラサルハ、自然ノ通習ト成  
 來、唯臺帳ニ其品物代價等記入、質客ニ可渡小紙切手ト押切  
 判ノ上、取引候事ニテ、臺帳ノ面何更質客ノ証據無之候處、却  
 テ印紙貼用候上ハ、後日ノ明証トシ及、訴訟候節ハ、取上裁判  
 候テ可然筋ト可相心得裁ノ旨、再應相同候處、本月二十日伺  
 ノ趣、質物臺帳ノ儀ハ、成規中第二類ノ印紙貼用可致品ニテ、  
 証左ト相成儀ハ勿論ニ候ヘ、共取上裁判可致裁否ハ、當省於

テ關係ノ儀ニ無之候條、猶司法省ヘ可伺出旨、大藏卿ヨリ指  
 令有之、右質物臺帳ノ面ニ、質客無調印ニテ、印紙貼用ノ分、取  
 上裁判ノ儀、如何可相心得裁、此段相同候也、

指令

印紙貼用有之ト雖モ、質入主ノ調印無之分ハ、裁判上証據ニ  
 不相立事、

第百九十八

詐偽借金ノ事

同上同縣伺  
七年十月廿五日指令

詐偽借金

甲一時金策ニ差支候ヨリ、乙ノ名ヲ借ト、借主ニ相立テ、自分  
 有合ノ印押捺シ、自分ハ請人ト記載シ、丙ヨリ金ヲ借ル、其金  
 返濟相滞ルニ付、丙ヨリ乙ヘ係リ及、出訴取調候處、乙ニ於テ  
 ハ、一切不存旨申立、受人タル甲取紀候處、全ク謀書謀印ニ相



違無之、尤借用金ハ速ニ返濟可致旨申立候處、右謀書謀印ノ  
 庶ハ、改定律第百四十六條私ノ文書ヲ詐偽スル者ヲ以テ論  
 シ、借ル處ノ金ハ、假令返濟スルノ念アリトモ、詐欺取財ヲ以  
 重ニ徒テ科斷シ可然哉、又ハ返濟スルノ念アル者ハ、借ル所  
 ノ金ハ、賍罪ヲ以テ論セス、民法ノ裁判ニ附シ、謀書印ノ庶ノ  
 科斷シ可然哉、但本文ノ如ク謀書謀印ヲ以テ金ヲ借り、返濟  
 ノ後發覺スルキハ、謀書謀印ノ罪ノミ科シ可然哉、  
 甲既ニ書入ニシタル所有ノ田畑ヲ重テ書入ニ為シ、乙ヲ欺  
 キ受人ニ為立刺右田畑ハ甲ノ所有ニ相違ナキ旨ノ戸長ノ  
 奥書ヲ詐偽シ、自分有合ノ印ヲ押捺シ、丙ヨリ金ヲ借ルアリ、  
 戸長ノ奥書ヲ詐偽スルハ詐偽官文書律内、縣ノ餘ノ文書ヲ

詐偽スル者ヲ以テ論シ、借ル所ノ金ハ、詐欺取財ヲ以テ重キ  
 ニ徒テ科斷シ可然哉、又ハ返濟スルノ儀アル者ハ前同様又  
 處分可然哉、但本書、甲ノ犯罪發覺拘留セラル、ヲ、受人  
 タル乙之ヲ聞キ、借用金ヲ貸主ニ返濟スル時ハ、甲ノ罪戸長  
 ノ奥書ヲ詐偽スル庶ノミ科スヘキ哉、右相伺候也、

指令

第一條文書詐為ノ庶ハ、改定律例第百四十六條私ノ文書  
 ヲ詐為スルヲ以テ論シ、第二條戸長ノ奥書ヲ詐為スルハ、詐  
 為官文書律、縣ノ餘ノ文書ヲ詐為スルヲ以テ論ス、負債金ハ  
 兩條共民法裁判ニ付シテ處分スヘシ、但書兩項共同ノ通

第百九十九

貸借諸件ノ事

同第百七十七号飾磨縣伺  
七年十月廿七日指令



昨年第十八號ヲ以テ御布告相成候、地所書入賃入規則第四條、地所ヲ賃入ニ致シ候節ハ、地券ヲモ可相渡云々ト有之、若シ右規則ニ違戾シ、賃取主ニ於テ、地券不受、取置者ハ、本年第六號御布達ニ類準シ、平常貸借同一ノ處分ニ可相成哉、若シ果シテ然ラハ、各地方ノ人民、地代價等ノ苦情アリテ、地券施行方未整備不致縣々有之、右ハ實地上規則ト相抵觸スルニ似タリ、地券不定ノ縣下ニ於テハ、如何相心得可然哉、舊藩々ヨリ、其管下人民へ多少ノ貸附金有之、當今大藏省ニ於テ、貸附ノ種類ニ因リ、八年或ハ十年等ノ年賦ニテ、御受納相成候處、右負債ノ者、他ノ私借アリテ、身代限リノ處置ニ及フ節ハ、公私ヲ不分金高相當ノ配分致シ、可然哉、

家屋并ニ屋敷地ヲ一紙ニ書載セタル賃物証文ヲ以テ、金數ヲ賃借スル者アリ、戸長ノ奥印村役場ノ割印等モ不取置、全ク賃入ノ規則ニ背反セリ、然ルニ借主他ノ負債アリテ、身代限リノ處分致スキ、地所ハ本年第六號ノ御布告ニ基キ、糶賣ノ代價、他ノ債主ト金高ニ應シ、配分可申付候へ共、家屋ノ儀ハ、同ヨリ不動産ニ屬シ、且村役場ニハ、必ス番號帳モ有之ト雖モ、未賃入ノ御規則ニ無之ニ付、右賃取主へ先取ノ權利ヲ與フ可裁サスレハ、一紙ノ証書半ハ正ク、半ハ規則ニ反シ、少ク不穩樣疑意ヲ生シ候間、御教諭被下度候、  
明治六年七月十日以後ノ証書類、及ヒ公私ノ文書ニハ、總テ年號月日ヲ書載可致、若シ疎漏ニシテ年號月日ノ内、何レニ



テモ略記シタル者ハ、裁判上証據ニ不相立旨、昨年二百十二  
號ヲ以テ御布告御座候ニ付テハ、日ノ字一字タリ、誤缺ノ  
証書ヲ以テ訟へ出ルキハ、裁判不及儀ト相心得候へトモ、右  
略記ノ証書、受取主ヨリ渡シ主相手取、缺字書入度旨、及、歎  
節ハ、愍然ノ情難、捨置候間、地方庶務課ニ於テ、被告人呼出、缺  
字書入候様説諭致シ可、然裁相伺候也、

指令

第一條 地方官心得方ノ儀ニ有之ハ、内務省へ申稟可致事

第二條 伺ノ通、

第三條 家屋而已先取ノ權ヲ有シ、地所ハ尋常貸借ヲ以テ  
處分スヘキ事、

第四條 詮議中ニ付、追テ可、及指令事、

損料品費用

第二百 損料品ヲ費用スル事

同上宮城縣伺  
七年十月廿七日指令

損料ニテ物品ヲ借り、失期、不返、ノミナラス、剩へ其物品ヲ費  
用シ、被及出訴、右處分振ノ儀、先般相同候處、原告訴ル所ノ原  
情且、最初約定ノ都合等、不分明ニテハ、御指令難相成ニ付、訴  
答書類ニ手續書并裁判見込、案相添、可奉伺旨、御指令相成候  
處、當縣管下宮城郡仙臺北、三番町居住貫屬士族良翰長男都  
澤民章ヨリ、仙臺立町工堀越義之助へ相係ル、損料布團并損  
料金、淹滞催促ノ儀、及、出訴、被告堀越義之助、右品費用セシ趣  
別紙答書之略ノ通、申立候、然ニ出訴ノ原情、約定証券ノ通り、布  
團并損料償金ヲ求度、本旨ニシテ、全ク彼ノ罪狀ヲ責ル實意

...

至



ニ非ルニ付其費用シタル罪ヲ問ハス、貸借上唯不返濟ノ庶  
ヲ以テ、身代限、處分致シ可然裁ト存候間、此段相伺候也、

指令

借主返濟相滞ルニ於テハ、伺ノ通、身代限迄ノ處分ニ及、不足  
ノ分ハ引受ノ明文アル親族へ代償可申付事、



